

《研究論文》

アメリカ南部における黒人初等学校制度創設の意義

— ジョージア州アトランタ市を事例として —

釧路公立大学 住岡敏弘

ABSTRACT

The Characteristics of foundation of the Primary School System for African American People in American South —The Case of Atlanta, GA

Toshihiro SUMIOKA

Kushiro Public University of Economics

The aim of this paper is to clarify the characteristics of foundation of the primary school system in Atlanta, GA from the perspectives of African American People.

Atlanta City Council decided to establish the primary school system in 1869. The City Board of Education started 3 grammar schools for White Children. But any schools were not established for African American Children. Instead, the City Board of Education got the Control of the Freedmen's schools which had been established by Northern Freedmen's Aid Societies after Civil War. As a result of City Policy, the inequality of the educational opportunity between races was expanded, and the educational values from northern schools were eliminated.

But the public schools did not lose African American People's confidence because the African American principals and teachers got reliance from an African American community, the parents and the children.

1. 課題設定

本研究では、公権力から排除されてきたマイノリティの側に立った公教育史分析を試みる。具体的には、アメリカ南部公教育の成立過程に焦点を当て、公的資料のみならず、黒人の側からの資料も含めて分析し、アメリカ公教育を再評価しようとするものである。

一般に、公教育史研究においては、公的資料の中立性、客観性、正統性が暗黙のうちに認められてきた。そのため、従来の黒人公教育史研究においても、南部州政府や教育委員会等による公的資料にもとづき、その形成過程が解明されてきた¹。しかし、研究の根拠となる公的資料には、

当時、州政府を支配していた南部出身の白人の意識が強く反映されていると考えられ、その点では公的資料に基づく研究が必ずしも中立的、客観的であるとはいえないと思われる。黒人公教育の形成過程を真に中立的な立場から研究しようとする場合、黒人の要求、公教育観等のいわゆる「黒人の側から」の視点が不可欠である²。こうした観点を踏まえてこそ、多文化社会、アメリカ合衆国の公教育のあり方を考えることができるといえよう。

そこで、本稿は、以下のような研究手法により、南北戦争終結時の1865年から、連邦最高裁判所において人種隔離体制が法的に確立された1896年までのジョージア州アトランタ市を事例として、初等学校制度創設過程のなかで黒人が黒人学校に如何なる意味を見いだしてきたか明らかにすることを目的としている。具体的には、公的資料を用いて市の初等学校制度の創設過程を整理するだけでなく、さらに、それらの学校が、黒人にとって如何なる意味を有していたかについて、同市で少年時代を過ごした人物の伝記や、黒人自身が黒人コミュニティについて記述した史料、すなわち黒人の主観的な資料等を活用した分析手法である。

2. 連邦解放民局と北部博愛主義団体による黒人学校の設立—黒人初等学校制度創設前史—

(1) 公教育創設前の黒人学校の設置状況

黒人は、教育を切望していた。奴隷制のもとで長い間夢見ていた自由を手にしたとき、まず、解放された黒人たちが願ったのは、本を読めるようになることであつた³。こうした要望に応じるために、アトランタ市でも、解放民局の援助のもとで、北部の教会関係者や慈善者たちが団体（北部博愛主義団体）を組織して、学校を設立した。1865年の6月はじめには、Western Freedmen's Aid Commission（以後、WFACと略称）⁴が、古い教会の建物に学校を開き、元奴隷が180名の子どもに授業を行った。これが市で最初の黒人学校であるといわれている⁵。その後、American Missionary Association（以後、AMAと略称）⁶の援助のもとで、同年11月には、貨車の内部を仕切って2つの教室が設けられ学校として使われた。これらの学校は、「Car Box」として広く知られることとなった。1866年の夏には、解放民局の南部連合廃物販売部将軍の命令で学校が建設されStorrs Schoolと名付けられた。さらに1867年9月にもFreedmen's Aid Society of the Methodist Episcopal Church（以後、MEと略称）⁷の管理のもとで黒人学校が設立され、Ayer Schoolと名付けられた（後に、Summer Hill Schoolに改称）⁸。

1869年までに、黒人に対して学校が4校設立された。そのなかで1校は黒人教会によって運営されていたが、残りの3校は北部博愛主義団体が運営していた。

(2) 学習・宗教・政治の中核としての学校

次に、同市で少年時代を過ごしたRichard R. Wright（以後、Richardと略称）を描いた伝記を分析し、「黒人の側」からみた黒人コミュニティにおける当時の黒人学校の役割を素描してみよう。

まず、学校が、幅広い年齢層の黒人大衆の「学習の場」であつたことが挙げられる。例えば、「Car Box」での学習の様子についてRichardの伝記には「本よりむしろ鞞に慣れ親しんでいた白髪の男女が、spellerのなかのABCの文字を理解しようと努力して、真鍮で縁取られた眼鏡を整え、彼らの小さなBlue Back Spellersをあちらこちらの方向に向けている⁹」と記されている。

第二は、学校が「祈りの場」であったことも指摘できる。Richardの伝記によると、「Car Box」では、The First Colored Baptist Church¹⁰の宗教行事がたびたび実施され、Storrs Schoolでも金曜の午後に祈りの集会有り、日曜学校も開催され、黒人が積極的に参加したことが描かれている¹¹。

第三は、学校が「政治集会の場」であったことである。Richardの伝記によると、「1868年秋には、日曜学校の授業のなかで、解放民局長官のO. O. Howard将軍による演説が来週の日曜日の朝にあることを耳にした。…当日の朝、Storrs Schoolの校舎に集合した群衆の先頭にRichardがいた。…皆、Richardの背後でざわめき、涙に満ち溢れたぼんやりした目をしていた。彼もハワード将軍によるTwitchell校長の紹介に感動していた¹²。」とStorrs Schoolでの政治集会の様子が記されている。当時の黒人学校が、解放民局（北軍）と黒人を政治的に結束させる場として、政治的な機能も有していたことが認められる。

このように、黒人初等学校制度創設前の黒人学校は、学習、宗教、政治等多様な機能を含み、大衆に開かれたコミュニティの集会の場所として捉えられていたのである。

3. 市の初等教育政策の展開—黒人初等学校制度創設過程—

(1) 白人に限定された市の公教育構想

一方、当時、アトランタ市では市民のあいだに公教育設立への機運が高まりつつあった。黒人も公教育に大きな期待を寄せていた。1869年9月には、市議会の決議に基づいて内部に2名の市会議員、7名の市民で構成された「公教育に関する委員会」(the Committee of Public Schools)が組織され、11月に市議会に報告書を提出した¹³。しかし、報告書は、今後、公教育創設の際に見込まれる学齢児童数算出の際に白人児童の人数のみしか取り上げていなかった。黒人に関しては、「現在のところ、解放民局や北部博愛主義団体による援助のお陰で、黒人に対する無償の教育施設が、白人のそれよりも拡大しつつある」との現状認識を示し、「白人児童の教育不足がより緊急の課題である」として「黒人の子どもの学校については一切勧告をしない」と結論づけ、黒人公教育を今後の課題としたのである¹⁴。

しかし、1870年12月の市長・市議員選挙で、黒人から支持を得ようとした共和党が、分離教育を前提にしつつも、黒人公教育を支持し、選挙の結果、共和党候補の市長が当選し、市議会内で共和党が4割の議席を獲得するなど、大躍進を遂げ、黒人に対しても公立学校が建設されるかと思われた。ところが、公教育のための100,000ドルの公債発行をめぐる1871年3月の市議会のなかで、民主党市議が、「公教育の受益者は納税者（当時ほとんどが白人）に限定すべきである」や、「黒人には既に解放民局や北部博愛主義団体により無償の教育が提供されている」という事実を根拠にして、黒人教育に強く反対した。この結果、市議会は、またもこの問題を先送りしたのである¹⁵。

(2) 黒人学校の市への移管をめぐる交渉過程

市議会において黒人公教育をめぐる暗礁に乗り上げた議論を解決に導いたのはAMAであった。1870年には解放民局が教育援助活動の停止を表明し¹⁶、AMAは、黒人に対する教育活動を展開するために、援助してくれる組織を求めていたのである。AMAは、彼らが設立した黒人学校が市政府から援助を獲得できるように、教育委員会と交渉を開始した。

1871年3月には、AMAの代表者が、Storrs Schoolをほとんど無料で教育委員会に貸与する計画を携えて、教育委員会と交渉した。これに対して、教育委員会は、低予算で黒人に公教育が提供できる魅力的なこの提案を受け入れた。そしてその年の5月には、「市内の黒人学校の理事会または運営者が、学校の施設及び基本財産を教育委員会の管理にまかせるならば、市長ならびに市議会はそれら（黒人学校）の教育活動に必要な教員の団を提供する手だてを講じるであろう」との決議がなされた¹⁷。その後、MEも、彼らが運営しているSummer Hill Schoolを教育委員会に貸与することになった¹⁸。翌年2月には、教育委員会は「校舎が無料で教育委員会に引き渡されているという事実を考慮して、2月の第1週から黒人学校に対する援助を実施すること」を可決した¹⁹。こうしてStorrs SchoolとSummer Hill Schoolは市に移管され、市の公教育制度のなかで8年制グラマースクールに位置づけられた²⁰。こうして市政府は、市内に居住する6歳から14歳までの就学希望の黒人学齢児童に対して無償の（授業料を徴収しない）初等教育を提供することになったのである²¹。

(3) 黒人学校に対する市教育委員会による監督体制の確立—黒人学校の脱「北部」化—

Storrs SchoolとSummer Hill Schoolが教育委員会の監督のもとに置かれると、これらの学校は市の法令に従うことになり、そのあり方も変わっていった。例えば、教科書については、これまで北部の公立学校で広く普及していた教科書が使用されていたが、移管後は、教育委員会内に設置されている「試験・教育課程・教科書委員会（The Committee on Examination, Course of Study and Textbooks）」の勧告を受けて南部で出版された教科書を使用することになった²²。

ただし、Storrs SchoolとSummer Hill Schoolは、白人公立学校とは異なり、学校の校舎を市に貸与するという手続がとられたために、学校における宗教上の活動ならびに教員の人事権について例外的な協定が北部博愛主義団体と市教育委員会とのあいだに締結されていた。すなわち、学校における宗教上の活動についてStorrs Schoolでは、「放課後、Storrs Schoolにおいて宗教上の会合を開く権利を有する」ことを教育委員会が容認しており、教育委員会が勝手にチャペル等を改修したり、別目的に利用することは許さなかったのである。これについてはSummer Hill Schoolも同様であった²³。また、教員の人事についても、Storrs Schoolについては「教員の任命に関する合意の理解をめぐる教育委員会とAMAのあいだで見解の相違が生じている²⁴」ことを理由として、教育委員会の承認を得た上でAMAが教員を任命することになっていた。そこで、Storrs Schoolでは、1872年以降一貫してAMAニューヨーク本部から教員を調達していた²⁵。

ところが、こうした例外的な協定も、Summer Hill Schoolについては、1876年には建物と用地が教育委員会に売却されたことで無効となった。一方、Storrs Schoolについても、教育委員会は、人事面での干渉を強化していった。1877年7月には、Storrs Schoolの賃貸協定の更新条件について教育委員会がAMAと交渉した際に、協定の更新条件として、校長の再任、3名の南部白人教員、3名の黒人教員の雇用という条件を提示した。すなわち、教育委員会は、黒人が求めている黒人教員の雇用を交渉材料にして、北部出身の白人教員を排除しようとしたのである。この背景には、黒人救済の使命に駆られた北部出身の教員が平等についての誤った考えを黒人のなかに植え付けるのではないかと、教育委員会が危惧していたことが挙げられる。交渉の結果、1877年10月に、Storrs Schoolに黒人教員とともに南部白人教員が雇用された。1878年には、教育委員会はStorrs SchoolをBig Bethel African Methodist Episcopal Church（以後、AMEと略称）²⁶

の教会地下室に移転させ、校名もStorrs SchoolからWheat Street Schoolに変更した。これを機にAMAとの協定も廃止となり、教員の人事権も教育委員会に移り、教育委員会は黒人学校に対する監督権限を確立していったのである。

(4) 「分離してしかも不平等」な黒人の教育条件

① 人種間の教育機会の不平等の拡大：黒人に無償の初等教育が提供されることになったが、人種間の教育機会の不平等は明白であった。初年度の1872年当時、黒人の学齢期の子ども数は3,139名で、白人のそれは3,345名であり、黒人と白人でほぼ同数であった²⁷。しかし、その年、3校の白人学校には2,791名入学したのに対して、黒人は2校で合わせて767名の生徒しか入学できなかった²⁸。そこで教育長は教育委員会に黒人学校を増設するよう促した²⁹。しかしその際にも、教育委員会は学校を新設することなく、黒人牧師が買い取りを申し出た建物を借り上げ、Haynes Street Schoolとして開校した。この学校は収容人数250名と言われていたがとても校舎といえる代物ではなかった。しかしそれでも300名の子どもが殺到しかなりのすし詰め状態になった。その後、黒人は、学校の増設を求めて請願したが、拒否された³⁰。1896年までに、白人学校は学齢児童数の増加に伴って15校建設されたのに対して、黒人学校は5校に留まったのである³¹。

② 教員の人種分離の確立：また、教育委員会は教員給与を、白人学校の白人教員では\$425～\$575に、黒人学校の白人教員では\$400～\$525に、黒人学校の黒人教員では\$300に設定し³²、運営の経費を節約するために、黒人学校での黒人教員の雇用を拡大した。1877年にStorrs Schoolに黒人教員が初めて2名雇用されると、1878年から1881年の4年間で、Wheat Street SchoolとSummer Hill Schoolに南部白人の校長の監督のもとに黒人教員を配置し³³、1881年にAMEの幹部が学校の黒人による学校経営を教育委員会に求めると、Houston Street Schoolに黒人教員を、Summer Hill SchoolとHaynes Street Schoolに白人教員を配置した。そして1887年6月には教育委員会はすべての黒人学校に黒人校長と教員を配置する決定を行ったのである³⁴。

4. 「黒人の側からみた」公立初等学校

次に、黒人自身が黒人コミュニティについて1894年に著した史料³⁵をもとに、当時の公立初等学校の特徴を「黒人の側」から明らかにする。

(1) 黒人の保護者や子どもにとっての公立学校—進学準備のための黒人学校—

当時、黒人学校に通ったことのある人々の履歴をみると、黒人コミュニティのなかで、黒人初等学校は、単に生活に必要な知識や技能を習得するだけでなく、上級学校への進学準備のための場所という位置づけがなされていたことが認められる。例えば、当時、黒人公立学校の教員をしていたMiss Mable B. Johnsonの学生時代のことが次のように記録されている。「彼女がまだ年端もいかぬ頃、彼女はHaynes Street Schoolに入れられた。…その学校で数年過ごした後、彼女はSummer Hill Schoolに転校した。このとき、彼女の母が、彼女に、もっとレベルの高い徹底した教育がなされることを望んだからであった。…1882年、…彼女は、南部で最初の女子大学のひとつである、Spellman Seminaryに入学した。入学してすぐ、彼女は下級師範クラス（Junior Normal class）に入ることができ、4年後、1886年に優等で卒業したのであった」と記されている³⁶。こうした記録は他にも数多く見られ、なかにはよりよい教育を求めて、ジョージア州の他の地方からアトランタに出てくる家族もいたとされている³⁷。こうした上級学校への進

学志向の背景には、グラマースクールに進学してくる保護者や子どもが、大学を卒業した後、黒人コミュニティのなかで高い地位にある職業や、専門的な職業に就こうとしていることが挙げられる。例えば、Houston Street Schoolについて、「このグラマースクールを卒業した生徒の多くが、市内や他の場所の大学を卒業して、現在、我々の市や州の公立学校で熟練の教員になっている。若い男性の多くはビジネス界に身を置き、政府内の地位を占めている者や、人生で賞賛を授かった人々が他にも多数いる³⁸」として、卒業生のことを誇っている。また、Mitchell Street Schoolも、卒業生の多くが教員になっていることを大変誇りにしていたのである³⁹。このように黒人は初等学校に積極的な意義を見出ししていた。ただ、初等学校の進学者が、上級学校に進学できる比較的富裕な階層の家庭の児童に偏っていた可能性も同時に指摘できる。

(2) 黒人学校における黒人校長・教員の役割—コミュニティと教育委員会の調整役—

教員については、まず、白人教員が家庭訪問はおろか保護者と話もしようしないなど、黒人学校に勤める白人教員に非常に強い不信の念が存在したことが認められる⁴⁰。これに対して、黒人教員は、黒人の子ども、その保護者や彼らが属するコミュニティからの信頼が高かった。例えば、1890年代初頭に私立学校の教員をしていたMiss Hattie M. Sturdivantは、子どもの頃に通ったWheat Street Schoolで出会った先生、Miss Elizabeth Easley Holmesのことを回想して、「優しく、好感もてる、優秀な先生であった」と好意的に捉えている⁴¹。また、Houston Street Schoolの校長のA. Graveについても、有能で、厳格な人物で、すばらしい教員であると述べるなど、黒人教員を批判する言説は全く見られない。

さらに、黒人学校の校長をみると、学校経営をめぐる教育委員会に対して良い心証を与えるように努力していることが認められる。例えば、Houston Street Schoolの「R. H. Carterは、1880年に校長に任命された。Professor Carterは、州内でも特に高い評価を得ている黒人教員を数人、彼の学校に雇い…能率的に学校経営を進める校長であることを自らが示すなど、あらゆる点で教育委員会や彼の後援者を満足させていた⁴²」と記され、また、Houston Street Schoolの校長の「Mr. Hershawは4年間校長を務めた。彼は、教育委員会や後援者を満足させるように学校を経営し、教員や校長として成功したのである⁴³」と評されている。一方で、「現在の校長先生の精力的な努力のおかげで、教員と生徒が相互に信頼することの必要性が今一度確認された⁴⁴」とするHouston Street Schoolに関する記述にみられるように、校長が、黒人教員と保護者の関係を良好に保つ上でも大きな役割を果たしていることがわかる。まさに、黒人校長や教員は、黒人コミュニティと教育委員会との間に立って、黒人学校に対する信頼を確保する上で重要な役割を担っていたのである。

5. 結 語

以上の状況から、まず、市の初等学校制度創設過程はおおよそ以下の3つの時期に区分することができる。

- ① 1869年—1871年 黒人教育排除期：1870年の「公教育に関する委員会」報告書にみられるように、当初、黒人教育は初等学校制度の構想のなかから排除されていたのである。
- ② 1871年—1878年 黒人学校の監督権確立期：1871年にAMAの働きかけを契機に北部博愛主義団体が設置した学校を市に「移管」という形で、黒人に公教育が提供されることになっ

た。教育委員会は、学校の監督権を段階的に確立する過程で、教科書や教員を通じて、北部的な価値観を排除し南部的な価値観の浸透を目指した。こうした動きは、黒人の伝記に見られる北部博愛主義団体の学校の特質と考え合わせると、黒人大衆と結びついた北部勢力の政治的拠点であった黒人学校を南部勢力のもとに置こうとする動きであると捉えることができる。

- ③ 1871年－1887年 公教育費抑制体制確立期：北部博愛主義団体からの「移管」では、低予算で黒人教育を提供しようという教育委員会の意図がみられる。その後も黒人学校の拡充は抑制され、しかも人件費抑制のために低賃金の黒人校長・教員の雇用を増やし、1887年にはすべての黒人学校への黒人校長・教員の配置の決定がなされた。この決定で、今後長く続くことになる「分離してしかも不平等」な教育の基盤、すなわち黒人に対する公教育費抑制の基本的体制が確立されたといえる。

これに対して、「黒人の側」から、黒人初等学校をみていくと以下の2点が明らかにされた。

第一に、黒人が教育機会の不平等な状態に不満をもち、すべての希望者が入学できるように学校の拡充を求めたことである。1875年には、Storrs Schoolの校長が「自分の子どもを入学させたいと願い、期待している多くの親が、失望し、悲しみながら去っている。…多くの親は、学校税を支払わなければならないことを『ひどく不快に』感じている。」と黒人の保護者の様子を語っている¹⁵。

第二に、市教育委員会による抑圧的な教育政策にもかかわらず、黒人が公立学校に積極的な意義を見出していたことである。すなわち、学校は黒人コミュニティで高い地位や専門的職業を望む富裕な家庭から進学準備機関と位置づけられていた。しかも、黒人校長・教員が配置された学校では、黒人校長がリーダーシップを発揮して黒人コミュニティと教育委員会の両者から高い信頼を得て、黒人教員も児童や保護者から尊敬や親しみの対象とされ、黒人による円滑な運営がなされたのである。

従来の研究では、南部の州や市により人種隔離体制のもとでいかに劣悪で不平等な教育が提供されてきたかについては明らかにされてきた。しかし、「黒人の側」からみると、抑圧体制のもとでも黒人は、黒人校長・教員への親しみと敬意を基盤として黒人学校に積極的な意義を見出していた点が読みとれる。ただし、それは、3 R S等の基礎的な学習を提供した初等学校制度創設前の黒人学校のように広く黒人大衆から意義を認められたのではない。むしろ、子どもに中等教育や高等教育を受けさせ、専門的な職業等で身を立てさせようとする一部の富裕な黒人が積極的な意義を見いだしていたのではないかと考えられる。こうした知見は、今後の黒人公教育の史的展開を追究していく上でも特に注目にしていかなければならないであろう。

6. 註および参考文献

- 1 Bond, H. M., *The Education of the American Social Order*, Octagon Book, 1966; Bullock, H. A., *A History of Negro Education in the South*, Harvard University Press, 1967; Vaughn, W., *Schools for All: The Blacks & Public Education in the South 1865-1877*, University Press of Kentucky, 1974; 小沢有作『民族教育論』明治図書, 1967年。
- 2 黒人独自の教育観については、B. T. ワシントンやW. E. B. デュボイス等の黒人リーダーの著作や言動を分析した研究が進められてきている。また、近年の社会史の影響を受けて、黒人コミュニティにおいて黒

人自身の組織的な教育活動についても明らかにされている。しかし、黒人が公教育をどのようにみていたかという黒人の公教育観について十分に明らかにされていない。

- 3 猿谷要著『アメリカ黒人解放史』サイマル出版、1968年、96頁。
- 4 南北戦争後、奴隷から解放された黒人の救済を目的として設立された民間の慈善団体のひとつ。慈善団体は、大きく世俗団体と北部プロテスタント系の宗派団体のグループに分けられる。WFACは当初、American Freedmen's Aid Commissionという世俗団体の連合体に加盟して救済活動をしていたが、その後、脱退し、プロテスタント系の宗派団体であるメソジスト派と協力して、MEを設立し、アトランタ、ナッシュビル等、南部の重要地点に学校を設立した。なお、北部博愛主義団体の黒人教育の考え方については、拙著「アメリカ南部における黒人公教育の基盤形成過程—南北戦争後の北部博愛主義団体の黒人公教育観を中心として—」、『広島大学教育学部紀要 第一部（教育学）』第15号、1996年を参照。
- 5 Thornbery, J., "Northerners and the Atlanta Freedmen, 1865-69," *Prologue*, VI, 1974, p. 245.
- 6 黒人の救済を行った北部博愛主義団体のうち最大のプロテスタント系の宗派団体。解放民局からも巨額の教育援助（総支出の約20%）を受け、南部各地に学校を設立した。AMAは、ニューヨーク本部から教師を派遣し、さらにAmerican Tract Society (ATS) を設立し、そこで教科書を制作し、各学校に配布した。（拙著「連邦解放民局の設立と米国南部黒人の教育の変容」、『広島大学教育学部紀要 第一部（教育学）』第17号、1998年、62頁。）
- 7 註4を参照。
- 8 Reed, W. P. ed., *History of Atlanta, Georgia*, D. Mason & Co. Publishers, 1889, pp. 324-325; Martin, T. H., *Atlanta and Its Builders*, Century Memorial Publishing Company, 1902, p. 262; Garrett, F. M., *Atlanta and Environs* Vol. 1, Lewis Historical Publishing Company, 1954, pp. 742-743.
- 9 Hynes, E. R., *The Black Boy of Atlanta*, The House of Edinboro, 1952, p. 11.
- 10 黒人が結成したバプティスト系の黒人教会。
- 11 Hynes, *op. cit.*, p. 14; Carter, E. R., *The Black Side A Partial History of the Business, Religious and Educational Side of the Negro in Atlanta*, n. p., 1894, p. 21.
- 12 Hynes, *ibid.*
- 13 *Rules and Regulations for the Government of Public Schools for the City of Atlanta*, The Constitution Steam Book and Job Print, 1872, pp. 7-8. (以後、*Rules and Regulations*と略称)
- 14 *Report of the Committee on Public Schools*, Economical Book and Job Printing House, 1869, p. 11.
- 15 Bacote, C. A., "William Finch, Negro Councilman and Political Activities in Atlanta During Early Reconstruction," *Journal of Negro History* 40, 1955, p. 358.
- 16 Alvord, J. W., *Tenth Semi-Annual Report on Schools for Freedmen*, BRFA, 1870, pp. 23-24.
- 17 *Rules and Regulations*, p. 12.
- 18 Atlanta Board of Education, *Minute*, 29 June 1871.
- 19 Atlanta Board of Education, *Minute*, 29 January 1872.
市の公教育制度は、8年制のグラマースクールと4年制のハイスクールで構成される8・4制がとられていた。
- 20 *Rules and Regulations*, p. 20.
- 21 *Ibid.*, p. 10; *First Annual Report of the Board of Education*, 1872, p. 22.
- 22 Thornbery, *op. cit.*, 1977, p. 90.
- 24 *First Annual Report of the Board of Education*, 1872, p. 23.
- 25 *Second Annual Report of the Board of Education*, 1873, p. 35.
- 26 黒人が結成したメソジスト系の教会。AMEは、信者獲得をめざって、MEと激しい競合状態にあったとされる。

- 27 Turner - Jones, M. E." A Political Analysis of Black Educational History: Atlanta,"
Ph. D. Diss. University of Chicago. 1982. p. 39.
- 28 *First Annual Report of the Board of Education*, 1872. p. 23.
- 29 *Ibid.*, p. 32.
- 30 Turner - Jones, *op. cit.*, pp. 43-44.
- 31 1880年にHouston Street Schoolが1882年にMitchell Street Schoolが建設された。
- 32 Bell, W. ed., *Personal Directory 1870-1900*, Atlanta Public Schools, 1973.
- 33 Thornbery, *op. cit.*, 1977. p. 126.
- 34 Bell, *op. cit.*
- 35 Carter, E. R., *The Black Side A Partial History of the Business, Religious and Educational Side of the Negro in Atlanta*, n. p., 1894.
- 36 *Ibid.*, p. 102-103.
- 37 *Ibid.*, p. 66.
- 38 *Ibid.*, p. 235.
- 39 *Ibid.*, p. 240.
- 40 Turner-Jones, *op. cit.*, p. 72.
- 41 Carter, E. R., *op. cit.*, p. 66.
- 42 *Ibid.*, p. 233.
- 43 *Ibid.*, p. 234.
- 44 *Ibid.*, p. 235.
- 45 Thornbery, *op. cit.*, 1977. p. 132.